

奈良における地域資源としての 歴史的庭園の評価に関する調査研究

研究代表者：山本 美和

共同研究者：青山 恵理 宇田 裕也 片岡 まりな 谷口 由依 得永 佳祐
中井 翔子 長田 咲紀子 新居 愛子 東 桃子 平澤 恵利

1. はじめに
2. 対象と方法
3. 結果および考察①—円成寺庭園
4. 結果および考察②—依水園
5. 結果および考察③—旧大乘院庭園
6. 総括—奈良の庭園の魅力とは

1. はじめに

「京都の庭園、奈良の仏像」という表現がある。確かに、京都の寺院には見事な庭園が備わっているものが多く、国内外における知名度も高い。一方、奈良の寺院はというと、「庭園」のイメージは薄く、その評価は専ら仏像と建築に集中しているため、奈良の庭園にはさほど目が向けられていない。しかし、奈良にも様々な時代の庭園が存在する。庭園とは、風土と、そこで暮らす人々の生活や信仰が織りなす産物である。この点でいえば、奈良の庭園には、京都の庭園とはまた異なる大きな魅力があるのではないかと考えられる。本グループ研究では、このような奈良の庭園の魅力の一端を、具体的事例に即して考究することを目的とした。

2. 対象と方法

(1) 調査対象地の抽出

最初に、奈良の代表的な庭園を、各地の庭園情報が網羅されている重森三玲・重森完途(1976)『日本庭園史大系』社会思想社、伊藤ていじ他(1979)『探訪日本の庭④近畿』小学館、森蘊(1993)『庭園』東京堂出版を中心に抽出、リスト化を行った。次いで、現在の一般的な評価傾向を測る手段として、特に2000年代以降の出版を中心に、奈良の情報誌・ガイドブックを収集し、リストアップした庭園に関する情報が記載されている箇所を抜粋・整理を行った。収集した雑誌・文献は、A：全般的な奈良情報関係5冊、B：社寺・歴史がテーマのもの6冊、C：英語版4冊、D：奈良検定本1冊である。リストアップした80庭園のうち、特に作庭時期が明確な58庭園を抜粋し、このA～Dにおける関連情報の有無との関係性を示したものが表1である。

結果、情報誌・ガイドブックに記載されていない庭園が全体の半数以上(58庭園中31庭園)に上ることが明らかとなった。これは、奈良の庭園の価値が未だ一般にはあまり知られていないことを示す一つの証左といえる。このような顕在化していない庭園のみに焦点を当てるのも重要なアプローチではあるが、我々は庭園研究の初心者であるため、まずは著名な庭園

表 1 奈良の主要庭園一覧

名前	所在地	作庭時代	名勝(文化財)	A	B	C	D
大神神社磐座	桜井市	上古		○	○		
飛鳥京跡苑池遺構	高市郡	上古	国指定名勝				○
石上遺跡庭園遺構	高市郡	上古					
小墾田宮跡庭園遺構	高市郡	上古					
上之宮跡庭園遺構	桜井市	上古					
遺跡額田部御池(額田部園池跡)	大和郡山市	上古					
平城宮東院庭園	奈良市	奈良	国指定特別名勝	○	○	○	
平城京左京三条二坊宮跡庭園	奈良市	奈良	国指定特別名勝		○		○
平城宮跡佐紀池庭園遺構	奈良市	奈良					
松林苑跡	奈良市	奈良					
十輪院庭園	奈良市	奈良					
円成寺庭園	奈良市	平安	国指定名勝	○	○	○	○
旧大乘院庭園	奈良市	平安+室町+江戸	国指定名勝	○			○
東大寺知足院庭園	奈良市	鎌倉		○			
今西家書院	奈良市	室町		○			
中宮寺庭園	生駒郡	室町				○	
東大寺龍蔵院庭園	奈良市	室町					
大蔵神社庭園遺構	吉野郡	室町	県指定名勝				
竹林院庭園	吉野郡	桃山		○	○		○
吉水神社庭園	吉野郡	桃山		○		○	
願行寺庭園	吉野郡	桃山	県指定名勝	○			
慈光院庭園	大和郡山市	江戸	国指定名勝	○	○	○	○
法華寺庭園	奈良市	江戸	国指定名勝	○		○	
矢田寺庭園	大和郡山市	江戸		○	○		
矢田寺庭園	大和郡山市	江戸		○	○		
当麻寺中之坊庭園	葛城市	江戸(桃山)	国指定名勝	○	○		
長岳寺庭園	天理市	江戸		○			○
藤岡家住宅	五條市	江戸		○			
当麻寺西南院庭園	葛城市	江戸		○			
興福院庭園	奈良市	江戸		○			
円照寺庭園	奈良市	江戸		○			
当麻寺護念院庭園	葛城市	江戸		○			
森村家庭園	橿原市	江戸	県指定名勝				
丹生神社庭園	宇陀郡	江戸					
本善寺庭園	吉野郡	江戸					
来迎寺庭園	桜井市	江戸					
本門寺庭園	大和郡山市	江戸					
有山氏庭園	生駒郡	江戸					
大中氏庭園	宇陀郡	江戸					
陶原氏庭園	桜井市	江戸					
中氏庭園	生駒郡	江戸					
東頭氏庭園	大和郡山市	江戸					
正暦寺庭園	奈良市	江戸					
東大寺宝蔵院庭園	奈良市	江戸					
依水園	奈良市	江戸+明治	国指定名勝	○	○	○	○
迎乗寺庭園	天理市	明治					
吉城園	奈良市	大正			○		○
旅館「朝日館」	吉野郡	大正					
志賀直哉旧居	奈良市	昭和		○	○		○
松尾寺庭園	大和郡山市	昭和		○			
大和文華館庭園	奈良市	昭和		○			
東大寺龍蔵院庭園	奈良市	昭和					
唐招提寺本坊庭園	奈良市	昭和					
桜井女子高校庭園	桜井市	昭和					
料亭 百楽荘	奈良市	昭和					
霊山寺庭園	奈良市	昭和					
春日大社社務所庭園	奈良市	昭和					
奈良県新公会堂庭園	奈良市	昭和					

を中心に、調査を通して、その魅力とは何かを自ら「発見」することに主眼を置くこととした。この観点から、名勝指定されており、かつ記載情報が最も多い庭園として、円成寺庭園、慈光院庭園、依水園の3庭園を抽出した。これに加え、価値があまり顕在化していない庭園として、奈良を代表する観光地（奈良町、奈良公園）に位置するにも関わらず、上記3庭園ほどの情報量を伴わない旧大乘院庭園、奈良県新公会堂庭園の2庭園を抽出した。以上の5庭園（表2に色で明示）に対し、その魅力の解明と地域資源としての可能性を探るために、以下の調査を行った。

表2 現地調査日程

調査地	調査日	調査時間	ヒアリングに応じて頂いた頂いた方々
旧大乘院庭園	9月4日(木)	9:30~14:00	名勝大乘院庭園文化館館長 植田様
依水園	9月11日(木)	9:00~17:00	名勝依水園・寧楽美術館副館長 田代様
円成寺庭園	9月17日(水)	9:00~14:00	円成寺住職の奥様
慈光院庭園	9月29日(月)	10:00~16:00	慈光院住職の尾関様
奈良県新公会堂庭園	9月30日(火)	10:00~14:00	奈良土木事務所 嶋田様、 奈良公園事務所 森様、馬場様

(2) 現地調査の内容

以上5庭園に対し、表2の日程で①~③の項目に基づく現地調査を行った。

- ①景観構造（近景・中景・遠景、シーン・パノラマ・シークエンス）の把握
- ②景観構成要素（石・水・植生・景物）の抽出と特徴把握
- ③関係者ヒアリング（庭園の履歴、維持管理の現況）

これと並行し、関連文献・古写真・絵図など対象庭園の履歴に関する情報収集を行った。

さらに庭園研究を行ううえでの前提知識習得のため、庭園の源流である「三輪山（大神神社磐座）」、「飛鳥京跡苑池遺構」についても同様に現地調査を行い、さらに「名勝」文化財の位置づけについて奈良市役所文化財課の森下様、小林様にヒアリングを行った。

(3) 調査結果の整理と価値の考察

現地調査①②の結果を図面に記入し、ヒアリングと情報収集の結果を歴史的背景、維持管理の現況、利用状況の3項目に整理して文書化した。これらの調査結果を踏まえ、対象庭園の魅力について全員で考察した。考察にあたっては、以下の3点を重視した。i) 視覚のみならず、五感を意識すること、ii) 敷地内のみならず、周辺エリアも広く視野に入れること、iii) 理由を明確かつ客観的に説明できること。

次いで、以上の考察で導き出された対象庭園の魅力をもっとも享受できる園内の地点を View Point（以下 VP とする。注：View としているが、ここでの体験は視覚だけではない）とし、各庭園の図面に記入した。同時に、各 VP を抽出した理由を明文化した。最後に、これらの作業を通して見えてきた奈良の庭園の価値と、地域資源としての可能性ならびに課題について考察を行った。以下、紙幅の関係上、特に円成寺庭園、依水園、旧大乘院庭園の3庭園に絞り、その成果を記載することとする。

3. 結果および考察①—円成寺庭園

(1) 歴史的背景

円成寺は、天平勝宝8(746)年唐僧虚瀧和尚の開創と伝えられているが、史実的には万寿3(1046)年命禅上人が十二面観音を祀られたのが始まりである。庭園は平安末期に寛遍僧正が築いたと伝えられ、池庭の様式からもこの頃の作庭と考えられている。浄土式と船遊式を兼ね備えた寝殿造系の庭園であった。以後、寺は2度に渡り大きな被害を受け、庭園も同様の危機に瀕する。ひとつは分正元(1466)年の応仁の乱である。本堂をはじめ一切の堂塔が焼失したが、翌年再建された。もうひとつは明治の廃仏毀釈である。大和名所図会(1791)にも描かれた壮大な伽藍は、これに伴い面影が失われ、以後荒廃の一途を辿る。一体となっていた園池部分と楼門以北は、県道で分断された。しかし昭和30(1955)年当時の奈良国立

文化財研究所森蘊氏らが行った実測調査の結果が評価され、県道も移設、庭園は県の名勝、さらに昭和48（1973）年には国の名勝に指定された。

これを機に、変貌が進み管理も不十分であった庭園を往時の姿に戻すため、昭和50（1975）年に発掘調査、51（1976）年に平安末期の姿へと復元改修する環境整備事業が行われた。この結果、荘厳な雰囲気を持つ庭園に生まれ変わり現在に至る。

（2）維持管理の現況、利用状況

植栽管理は、毎年9月に1回、特定の造園業者に剪定を委託している。もとは自由に刈り込んでいたが、先述の環境整備事業の実施に伴い（森蘊氏のアドバイス）現在のような自然仕立ての剪定手法に変更した。一方、楼門以北の敷地には、明治以降、代々のご住職やその奥様の趣向が反映され、多種多様な植栽が導入されており、剪定も比較的自由である。なかにはササユリやイチゴの木など、希少な植物も含まれている。また、敷地全体において自生のモミジが増殖しており、抜いてもすぐ生えてくるため、基本的には自然に任せているとのことであった。

全般的に観光客数は多いとはいえないが、萩（楼門以北に植栽）の咲く時期や紅葉の時期にはやや増加する。山中にあり交通は不便だが、日本語を話すことができる外国人観光客や、遠方から定期的に訪れる固定客が存在する。

（3）VPとその理由

この庭園は池を囲むように園路が配されており、池の北部、階段を上った楼門の先に寺院建築が立ち並んでいる。楼門北部と庭園とは高低差があるが、かつてのようにここで分断されているわけではなく、一体として捉えてこそ、この庭園が生きてくる、という認識が重要である。さらに、浄土式庭園の思想に基づくと、池を挟んだ楼門北部、本堂（阿弥陀堂）を中心とした伽藍一帯が浄土に当たる。この関係性を体感できるところに本園の魅力があるといえよう。以下、具体的なVPとその理由を示す。VPの位置は図1に示す。

VP①：池を挟んで楼門を一直線に見ることができる（写真1）。ここから見る景色は、水面に浄土が映り別世界のように美しく、別世界の作庭思想を最も感じとることができる。季節により移り変わりが特に感じられるポイントでもあり、特に秋に見られる紅葉が素晴らしい。また、かつては県道により分断されていたのを、庭園の再発見のなかで取り戻したという歴史的経緯から、文化財としての庭園の保全継承のあり方を考えさせられる地点でもある。

VP②：池を挟んでVP①との対称地点。高台に位置し、浄土から此岸を見下ろすことができる。高低差があるからこそ、ここから見下ろす景色は、その世界観をより深く認識することができる。VP①からの「見上げる」景色と対比することで、よりこの庭園の奥深さを体感することができる。

VP③：伽藍の西部、受付付近に広がる「植物と水の流れ」である。一帯は浄土に当たるが、代々のご住職や奥様により植栽された様々な植物が自由に剪定され、四季折々の自然の「顔」を楽しむことができ、良い意味で違った面をみることができる。また、下から水をくみ上げているため思いがけないところから水が流れ、その優しい水音が聞こえてくる。園内で最も水音を明瞭に聞き取ることのできる地点であり、それが多様な植物と相まって、安らぎの空間を提供している。



写真1 円成寺庭園（撮影者：谷口由依）

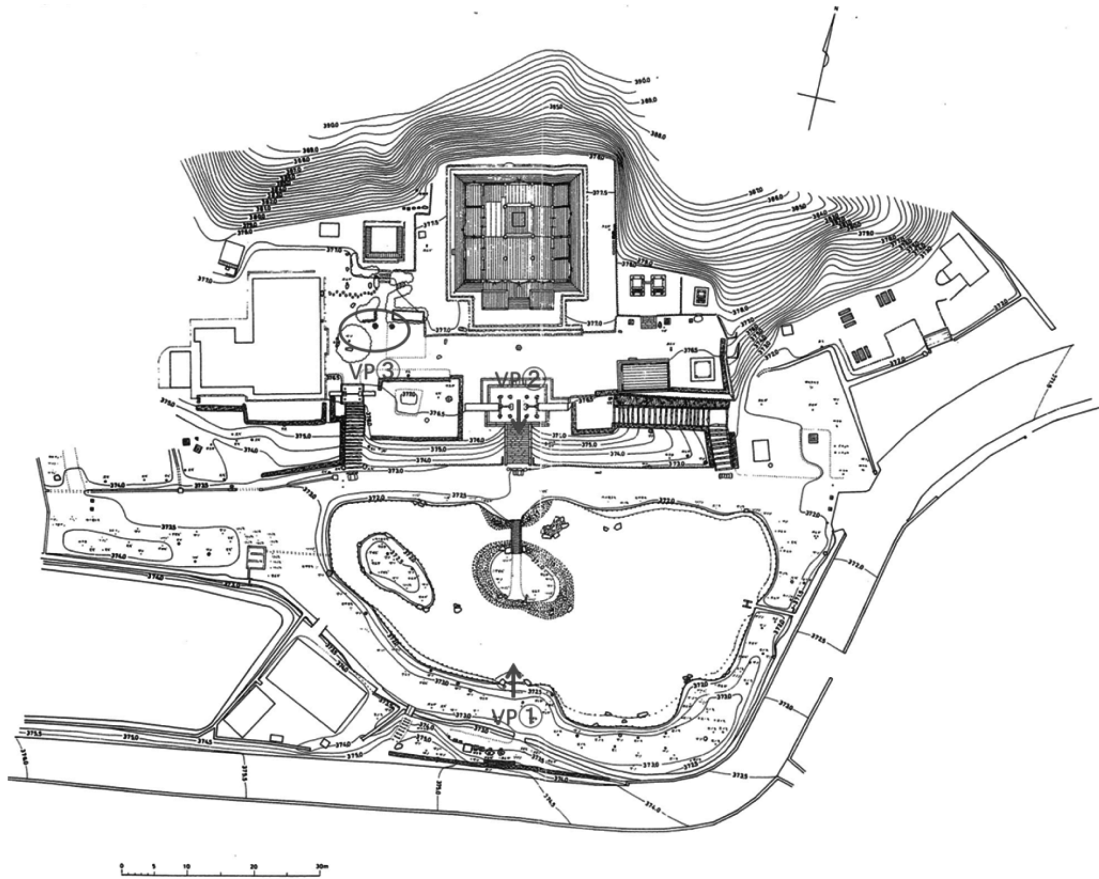


図1 円成寺庭園のVP

※ベースマップは庭園文化研究所（1977）『名勝円成寺庭園環境整備事業報告書』収録の円成寺庭園実測図（整備後）」

4. 結果および考察② 一依水園

(1) 歴史的背景

依水園の成り立ちは江戸前期に遡る。奈良晒業の御用商人であった清須美道清が、別邸として煎茶を楽しむために三秀亭を設け、古城川の水を引き、春日・若草・御蓋の三山を望む庭園を作った。これが現在の前園である。その後明治 32 (1899) 年に、同じく晒業を基盤に奈良屈指の豪商となった関藤次郎が、池泉回遊式の広大な庭園（現在の後園）を作り上げた。その後、昭和 14 (1939) 年に関家から中村家に渡り、戦時中の GHQ による接収を経て、昭和 33 (1958) 年より公開されて現在に至る。神戸において海運業で財をなした中村準策（奈良市出身）は、この地に収蔵品を公開する美術館を構え、庭園にも幾つかの手を加えた。例えば現在後園の池畔にある水車小屋は、昭和 37 (1962) 年、敷地東奥のため池から移設したものである。大きな変化の節目となったのが平成 16 (2004) 年である。平城遷都 1300 年となる平成 22 (2010) 年までに一定の完成を目指し、文化庁の補助で庭園基礎調査が始まり、繁茂したツツジや松など園内樹木の修復剪定や整理等、往時の景観に近づけるための修復整備が進められた。この結果、特に後園の眺望は劇的に明瞭なものへと変化した。

(2) 維持管理の現況、利用状況

植栽管理は、平成 14 (2002) 年以降、従来の業者に代わり、奈良在住の造園家牧岡一生氏のもとで行われるようになった。庭園技術の伝承や若手庭師の育成を目指した実習の場としても活用されている。近年課題となっているのは、苔の保護である。来園者は苔の上を歩くことが多いため、その影響ではがれてきてしまっている。この対策として、エリアを決めて苔の養生を行っている。二つ目課題はシカ対策である。奈良公園のシカが侵入し、唾液で枯れている植栽がみられる。対策としてフェンス設置や馬酔木を植えているが、排除は難しい。また、河川水位の低下から昭和 50 年代より循環水装置に切り替えているが、水質・水量の維持や排水は一貫して大課題であり、対策に苦慮している。

高度経済成長期、奈良交通の団体バスの定期ルートに組み込んでいたこともあったが、傷みが酷いため廃止、現在は同様の取り組みはなされていない。現地調査時に閲覧した入場者データによると、4・5月、10・11月に顕著な増加がみられる。特に近年は外国人の観光客数が増加しており、海外のバカンスのシーズンの長期休みを利用し、2・8月に訪れる傾向にある。今年の8月は、来園者 200 人中 170 人が外国人であったとのことである。

(3) VP とその理由

依水園の最大の魅力は、後園からみた御蓋山、若草山、東大寺南大門、春日奥山の眺望である。但し重要なのは、ここに至る回遊の過程で様々な景色の移り変わりが楽しめるよう工夫されており、だからこそこの眺望がより印象深いものになっているという点である。

従って本園では、全体として、高低差や奥行、景色の変化を豊かに楽しむことができる。また前園・後園ともに大きな池を持ち、これらを繋いで敷地全体に水が流れているため、回遊過程で様々な水の表情を楽しむことができる。さらに、花木による季節の変化に加え、敷地が東西に長いいため 1 日の変化を楽しむこともできる。午前中には東の光が入り込むため前園が、午後は西日が差し込む後園が美しい。以下、具体的な VP とその理由を示す。VP の位置は図 2 に示す。



写真2 依水園（撮影者：片岡まりな）

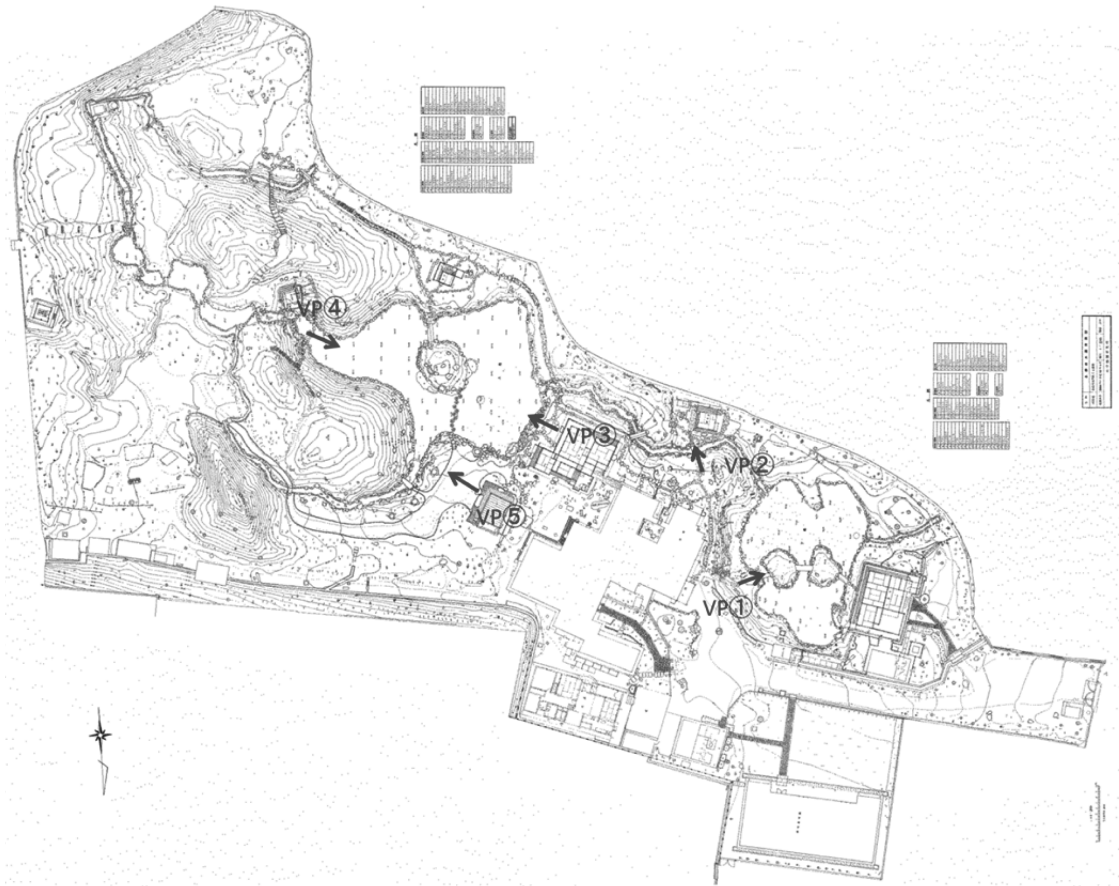


図2 依水園のVP

※ベースマップは公益財団法人名勝 依水園・寧楽美術館所蔵の平面図

VP①：入口から入り、最初に前園が見渡せる地点。入口が狭いため、対比効果で池の印象が強くなり、水の音も聞こえるため、来園者は外界と異なるこの庭園の世界に一気に引き込まれることとなる。これから巡る後園までのシークエンスの起点としても重要。

VP②：池の周りをぐるりと歩いていくと水の音が聞こえてくる。この場所から見える苔のエリアは、養生のため現在は立ち入ることができないが、苔の濃い匂い、湿り気、前園の広がりから一転して閉じた空間を楽しむことができる。

VP③：前園からの開閉の空間を楽しんだ後、後園に進むと、一気に大きな池を中心とする景観が開けるこの地点に至る。東大寺南大門と春日山と若草山を借景とする景色は一枚の絵のようである。広い水面に映る景色も同時に楽しむことができ（写真2）、蓮の花が咲く時期にはさらなる彩りが加わる。

VP④：VP③から進むと再び視界が狭まり、開閉の空間を楽しむことができる。水面から一旦離れるため静かになり、鳥の声や植物の匂いを楽しむことができる。この過程ののち、本園で最も高いところを経て辿りつく地点がVP④である。池内の飛び石を渡る道と別の道に分かれており、飛び石からは後園の池と建築を一望できる。

VP⑤：VP④から進むと右手に、ツツジの刈込を背景に小さな丸い石を敷き詰めた小川があり、細かく光りながら水が流れ、後園の池に流れ込んでいる。この過程を経て再び

池越しに借景を享受できる地点がVP⑤である。ここからは、近年の修復剪定の結果、御蓋山の頭頂部を見ることができるようになった。

5. 結果および考察③—旧大乘院庭園

(1) 歴史的背景

大乘院は寛治元（1087）年頃、興福寺の一院として創建された。第3代の尋範大僧正入室を機に「門跡寺院」としての地位を確立していったが、治承4（1180）年平氏の南都焼き討ちで被災。翌治承5（1181）年に現在の場所（元興寺別院の禅定院。以前から門主が兼任していた）に移築され、以後明治初年の廃絶まで継続した。この間、2回大きな改造が行われている。1回目は室町時代、徳政一揆の影響を受け荒廃したため、尋尊大僧正が復興造営に尽力。当時作庭の名手として著名であった善阿弥父子を招き庭園も大改造した。舟遊も楽しめる広大な池をもつこの庭園は、「南都随一の名園」と称えられるほどになった。2回目の改造は江戸時代、安定した経済基盤から各種建築と共に、茶室八窓庵（明治25年に奈良国立博物館に移築）も造られ、園池もより広大な池泉回遊式の庭園に整備された。しかし明治には廃仏毀釈の影響で廃寺となり、明治10（1877）年に売却された。飛鳥小学校や奈良ホテル（明治42年隣接する鬼蘭山に建設）の土地となり、庭園は大きく変貌・荒廃する。昭和13（1938）年には中央を貫通する道路計画も浮上したが、本園の価値と保存を主張する田村剛や重森三玲らの反対もあり敷地東端に移動、昭和33（1958）年には大部分が国の名勝に指定された。平成7（1995）年から奈良文化財研究所による発掘調査が開始、埋まっていた江戸時代の遺構である西小池の状況が明らかとなり、この一帯を中心に復元整備が進められてきた。平城遷都1300年となる平成22（2010）年に一定の完成をみて、同年の春に一般公開され、現在に至る。

(2) 維持管理の現況、利用状況

明治以降、土地所有者・管理者は変遷を繰り返すが、昭和 47 (1972) 年からは (財) 日本ナショナルトラストが本園の管理団体に指定され、土地所有者である JR 西日本、奈良市 (文化財課) と共に管理協議会を構成している。また、平成 8 (1996) 年より敷地南東角に「名勝大乘院庭園文化館」が発足、現在は奈良市の指定管理者として、奈良ホテルが管理運営に当たっている。これら複数の組織が連携しつつ管理運営を行っている。

ヒアリングによると、2012 年度と 2013 年度ともに、入園者数は文化館への入館者数の 5 分の 1 程度に止まっていることが分かった。利用の促進を目指し、コンサートや庭園観賞の茶席、講演会などのイベントを定期的に企画・開催している。



写真 3 旧大乘院庭園 (撮影者：得永佳祐)

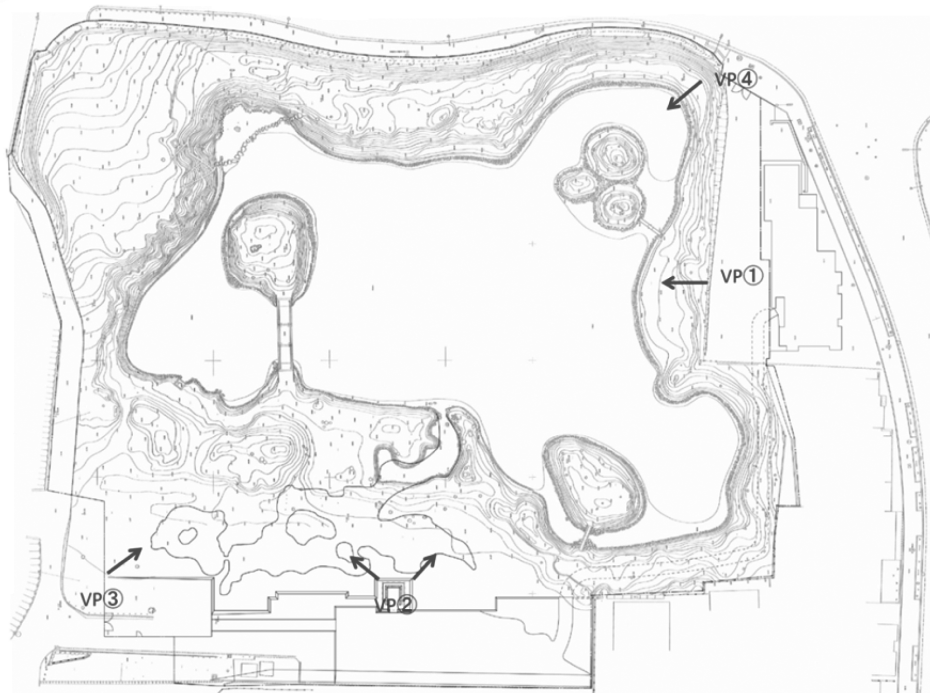


図 3 旧大乘院庭園の VP

※ベースマップは (財) 日本ナショナルトラスト所蔵の平面図

(3) VP とその理由

この庭園は、広大な池を中心に、様々な時代の様式である「顔」が「庭園」という一つの枠の中に散りばめられている。変わっていく時代の中で、変わらずにいてほしいという人々の思いが形になったものとして「旧大乘院庭園」が今の形を保っている。しかもそれはまだ未完成であり、現在進行形でもある。ゆえに、一人ひとりの想像力をかきたてる庭園となっており、この点が大きな魅力である。以下、具体的なVPとその理由を示す。VPの位置は図3に示す。

VP①：現在、この庭園の動線は文化館から始まるが、入口から足を踏み入れた北側に広がる景色である。橋の赤色が印象的で（写真3）、手前にサルスベリの緑も重なって見ることができる。さらに、これらの要素が全て広大な池の水面に映っているため、より一層生き生きとした景色を享受することができる。また、ここからは江戸時代の姿を示す天神島とサルスベリが植わった三ツ島を見ることができ、広大な水面のアクセントとなっている。

VP②：VP①から西へ歩いていくと休憩施設が見える。VP①は東大池を縦（南北）に見る景色だったが、VP②からは横（東西）に見ることができる。こちらの幅が広いと、より本園の壮大さを感じさせてくれる。さらに、手前には発掘で明らかになった複雑な汀線をもつ西小池が広がり、本園に流れてきた時間の連続性を感じさせる。すぐそばに置かれた「大乘院四季真景図」（江戸末期に描かれた、春夏秋冬の景色を一枚に表した図）が、当時の庭園の姿を想像するのを助けてくれる。

VP③：休憩施設から北に向かって奈良ホテル側へと歩くと、園内でも起伏に富んだ地点に着く。ここからの景色は、少し高い地点から見下ろす形になっているため、庭園全体を一つのまとまりとして捉えることができる。VP①②では壮大な庭の姿を見てきたが、ここで改めて庭園の全体像を認識することができるのである。また、室町の姿を止める要素として、架橋されている中島を見ることができる。

VP④：最後に南へ向かって一周していく、突き当り付近である。一見何の変哲もない場所に見えるが、先ほどの高い地点にあったVP③とは違って低く位置にあるため、視線が低くなり、池と島がより近くに感じられるため、非常に迫力がある。高低差がもたらす視線の変化により、回遊式庭園としての面白さが最も感じられる地点といえる。

6. 総括—奈良の庭園の魅力とは

最後に、以上の調査を踏まえ、そもそも「庭園」という存在を地域の「資源」として捉えるにあたって、どのような点に着目することが重要か、改めて全員で考察を行った。議論の結果、以下の3点が挙げられた。

まず、所有者の思いが顕著に現れているという点である。庭園の関係者に話を伺うなかで、歴代の管理者（所有者）が、各々創意工夫を凝らしつつ、その庭園を受け継いできたことが分かった。その積み重ねが現在の庭園である。ゆえに、違う時代の技法に基づく形が、同じ空間に残っている庭園もある。現存する歴史的庭園には、改修されたもの、修復されたもの、大々的に復元されたものと様々なタイプがみられるが、その過程で素材を残したり面影を残したりする工夫がなされている。単に形のみに注目するのではなく、いろんな時代の人々の思いがそこに反映されているという部分、この庭園と共に在った人の記憶が形として残っているという点が非常に重要と考える。この点に着目することは、個々の庭園の活用の可能性

を広げると共に、誤った方向に行かないための道しるべにもなるのではないかと考えられる。

二つ目に、時代の流れを感じることができる点である。いつの時代においても庭園は維持管理によって人の手が加わりやすい存在だが、昔ながらの技術や庭園の本質は守り継がれている。また、三つの時代を一度に楽しめるなど、一つの庭園でも様々な時代に思いをはせることが可能である。このように庭園はあらゆる時代と対話をするツールとなりうる。

従って、その庭園が存在する地域の歴史認識に豊かさをもたらす重要なツールとなり得る。

三つ目に、周辺環境との連続性である。庭園は遠景や借景のように、周囲とのつながりを考えてつくられている。時には周囲の景観によってスケールが圧迫されることもある。よって点ではなく、面的に庭園をみななければならない。このように、庭園とは立地する地域の自然と人間とが織りなす総合芸術である。従って、庭園は豊かな地域の環境をつくるための生きた教材にもなり得るのである。

さらに、「奈良の庭園」を地域の「資源」として捉えるにあたっては、以下の点に着目することが重要と考える。京都は有名な庭園が数多く存在し、多くの人々が訪れるが、現代では「庭園」というよりも「観光スポット」としてのイメージが強くなっているともいえる。それに対して、私たちが調査を行った奈良の庭園は、いずれも京都ほどは観光地化していない。これは決してマイナスではなく、むしろ利点と考えられる。人が殺到しないからならこそ、じっくりゆっくり、人それぞれのペースで庭園の良さを発見する楽しさがある。五感を開放して、庭園ならではの瞬間の場面を切り取ることもできる。庭園と私たちが、1対1で向き合うことができる。奈良の庭園には、このような本来の「庭園」としての魅力を味わうことができる良さがある。

主要参考文献

- 重森三玲（1943）『日本庭園歴覧』晃文社
- 森蘊（1964）『日本の庭園』吉川弘文館
- 伊藤ていじ（1965）『古都のデザイン 借景と坪庭』淡交新社
- 森蘊（1973）『庭ひとすじ』学生社
- 重森三玲・重森完途（1976）『日本庭園史体系 1-34』社会思想社
- 庭園文化研究所（1977）『名勝円成寺庭園環境整備事業報告書』円成寺
- 伊藤ていじ他（1979）『探訪日本の庭④近畿』小学館
- 大久保信治（1984）『奈良の庭園』奈良市
- 森蘊（1993）『庭園』東京堂出版

謝 辞

現地調査・ヒアリングにご協力を頂いた名勝大乘院庭園文化館の植田様、名勝依水園・寧楽美術館の田代様、円成寺住職奥様の田畑様、慈光院住職の尾関様、奈良県土木事務所の嶋田様、奈良公園事務所の森様、馬場様、奈良県奈良公園室の仲様、奈良市役所の森下様、小林様、図面提供を頂いた名勝依水園・寧楽美術館、日本ナショナルトラストの皆様、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。